日本メキシコ交流 400 周年における映像表現
―『ドン・ロドリゴの来た道』制作をめぐって―

竹　藤　佳　世

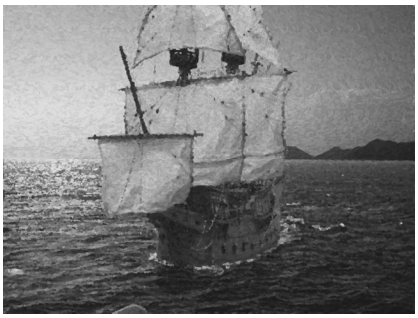
400th Anniversary Exchange between Japan and Mexico
－From the short film, “The Route of Don Rodrigo de Vivero” －

Kayo Takefuji

Abstract

This short film, “The Route of Don Rodrigo de Vivero”,was produced by the faculty and students of Josai International University, Department of Media Studies.It was a contract research project from the Natural History Museum and Institute of Chiba Prefecture to commemorate the 400th Anniversary of Exchange between Japan and Mexico. The origin of this story is a historical fact.

In the year 1609, Rodrigo de Vivero, after finishing his term of office as Governor of the Philippines, was en route back to Acapulco, Mexico (referred to as New Spain at the time) when he became shipwrecked in the town of Onjuku in Chiba Prefecture. As a result of the rescue efforts of the residents of the town, the lives of 317 of the 373 passengers were saved.



In consideration of this historical exchange, the filmmakers bring to light, the friendship between two different cultures.

１．映像制作に至った経緯

『ドン・ロドリゴの来た道』は、城西国際大学メディア学部が千葉県立中央博物館からの委託を受け、文化庁地域文化芸術振興プラン推進事業の一環として制作した短編映像である。この映像の題材は、以下のような歴史的事実に依っている。

1609 年（慶長 14 年）9 月、当時スペイン領だったマニラから出発したガレオン船サン・フランシスコ号は、前フィリピン諸島総督ロドリゴ・デ・ビベロを乗せ、ヌエバ・エスパーニャ（現在のメキ

シコを中心とした地域を統括した当時のスペイン副王領）へ向かう途中、上総国夷隅郡岩和田（現在の千葉県夷隅郡御宿町）沖で遭難した。

しかし、近隣の村人の献身的な救助により、乗員・乗客 317 人が救出され、ロドリゴ一行は、村人や、領主である大多喜城主、本多忠朝からの暖かいもてなしを受けた。さらにロドリゴは江戸で徳川秀忠、駿河で徳川家康に謁見し、歓待を受けて、翌年、ウィリアム・アダムズの指導のもとで幕府が建造したサン・ブエナベントゥラ号でヌエバ・エスパーニャのアカプルコ港に帰還した。

江戸時代初期に起きたこの出来事は、その後幕府の鎖国政策により、歴史に埋もれていったが、明治になって日本でも知られるようになり、1928 年には、一行が漂着した田尻海岸近くに「日西墨三国交通発祥記念之碑」が建立されるなど、日本とメキシコの交流の始まりとして、現在に続くメキシコと日本の友情を育む礎になっている。

2009 年はドン・ロドリゴ漂着から 400 年にあたり、日本メキシコ交流 400 周年として、様々な分野で両国間の交流を促進する事業が行われた。城西国際大学メディア学部では、2006 年より「ドン・ロドリゴ漂着と日本メキシコ交流」についての研究および映像制作を進めており、ドン・ロドリゴ一行が辿った大多喜城（現在、跡地に千葉県立中央博物館大多喜城分館が建立）への道程のパラグライダーによる空中撮影や、大多喜お城祭りの撮影等を行ってきた。『ドン・ロドリゴの来た道』は、こういった研究の蓄積と、文化庁の助成による新たな資金の獲得により、400 周年を機としてこの史実について、今後とも長く視聴に耐えうる映像作品を制作することを目的として企画された。

ドン・ロドリゴ漂着地　御宿町　田尻海岸高台に建つ

「日西墨三国交通発祥記念之碑」

２．映像の方向性：ドキュメンタリー・ドラマ・アニメーションをミックスしたアプローチ

博物館における資料としての性格から、史実に基づいて制作することが基本となるのは当然である。しかしながら、映像という、ごく即物的に撮影対象を要するメディアに収めるには、この題材は困難な側面をもっていた。その多くは 400 年という長い年月が経っていることによっているのだが、周辺の景観その他が変わっていることはもちろん、漂着地が田尻海岸であること以外は、ロドリゴ一行が滞在し

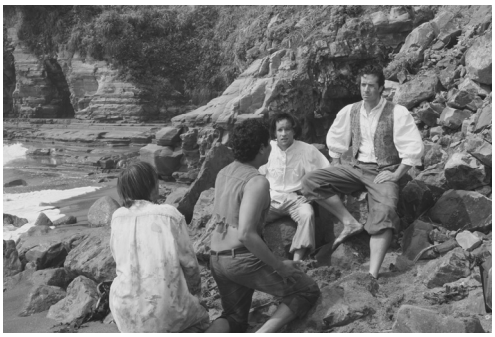
たと言われている寺（大宮寺）の所在さえ不明であり、遺物も、伝承はあるものの、はっきり当時のものだと確証のあるものが残されていないのである。

この出来事に関する日本側の資料は、幕府の外交関係の事務を管掌した金地院崇伝による『異国日記』、地方の記録である『房総志料』『上総国誌』などに、数行の記述があるのみで、村での暮らしぶりなど詳しいことはわからない。ロドリゴたちが去った数年後、徳川幕府による厳しいキリシタン弾圧や鎖国政策が打ち出されたのであるが、そうした背景が、この史実が明治になるまでほとんど日本で知られていなかったこととも関連しているものと思われる。

しかしながら、ロドリゴ自身が、日本での見聞を口述した記録の写本が、スペインの国立文書館と大英図書館に残されている。原著の所在は不明で、これらの写本には不完全な部分や、食い違いなどもあるが、漂着の経緯やロドリゴたちの日本国内での行動、当時人口 300 人余りだった岩和田の村で、317 人の漂着者が 37 日間暮らしたことなどが記されている。有能な政治家でもあったロドリゴの、日本人や日本の国力についての鋭い観察や分析もあり、当時の人々の考え方やロドリゴの人物像を知る上でも貴重な資料である。

また、監修として関わっていただいた小倉明氏による『ドン・ロドリゴの幸運』は、時代考証や地元での調査などに基づき、ロドリゴを主人公にした物語として平易に読むことのできる好著であり、多くの啓示を受けた。小倉氏には映像制作においても、多くの資料を提供していただき、取材先もご紹介願うなど、多大なご協力をいただいた。

そうした資料の中から、短編の映像として、どのような部分をクローズアップするかを検討した。当初はドキュメンタリーとしてのアプローチを考えていたのだが、この出来事を広く一般に周知するためには、まずこの話自体を印象強く、感情移入できるような形の表現にするべきではないかと考えた。当時の村人が国や宗教の違いを越えて、見知らぬ異国人を助けたという点が、この出来事が 400 年たっても色あせない、もっとも感動的な点ではないかと思われることから、ロドリゴ一行の岩和田への漂着と村人による救助の場面を中心とすることとした。



タイトルである『ドン・ロドリゴの来た道』は、ロドリゴたちが辿った航路、すなわちスペインが開拓したアカプルコ～マニラ間のガレオン交易の航路に由来する。新大陸とアジアを結ぶこの海の路は、スペイン帝国にとって莫大な富をもたらすものであり、非常に重要なものであった。ロドリゴ一

行はじめ、この時代のスペイン船の日本への漂着は、黒潮にのってメキシコに向かうこのルートの発展に伴い、ある種の必然としておきたものだったといえよう。こうした房総半島の地域の歴史と大航海時代の世界の歴史とがクロスする背景を明解に表現するために、記号化されたアニメタッチの CG を導入し、資料映像として挿入することとした。またロドリゴたちが乗船していた当時の武装商船、ガレオン船については 3D のモデルを作成して、CG アニメーション及び実写映像との合成を行うこととした。

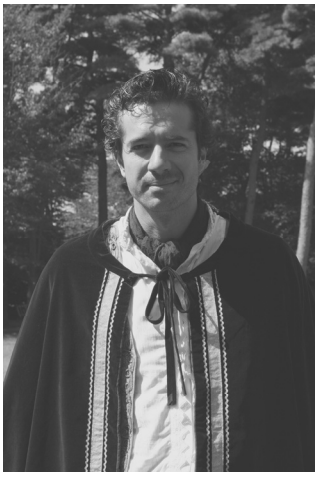
３．制作体制：大学・プロのスタッフ・学生のコラボレーション

スタッフについては、城西国際大学の教職員、プロのスタッフ、そして学生が一体となって協力し、体制づくりを行った。メディア学部成瀬教授がプロデューサーを、准教授である竹藤が監督・脚本・編集をつとめた。撮影監督に 2008 年度の毎日映画コンクール撮影賞など各賞を受賞した、俊英・辻智彦氏を招くなど、撮影・録音・照明・衣装・メイク・制作などの各パートでは、映画の現場で活躍するプロフェッショナルがチーフとなり、そこにメディア学部の学生がアシスタントにつくという形をとり、学生にとって実地での教育機会ともなった。また学生には村人役にも扮してもらった。

田尻海岸での撮影風景

村人役に扮するメディア学部学生

キャスティングについて、主な出演者はオーディションを行った。ロドリゴ役にダビデ・ナラスキさん、村の娘役に安部魔凛碧さん、滝川いづみさん、村の長に飯島大介さん、村人に岡部尚さん、椋田涼さんなどを配した。また、漂着者役には、スペイン語圏からの留学生を中心とした皆さんにご協力いただいた。上智大学のハビエル・カルバハル君には、ロドリゴの部下アントン役として出演してもらうと同時に、スペイン語の監修や指導などもお願いし、400 年前のスペイン語に近い言いまわしを工夫してもらった。御宿の方言指導には、御宿町役場の岩和田地区出身の職員の方にご協力いただいた。



ダビデ・ナラスキさん

滝川いづみさん　　安部魔凛碧さん

飯島大介さん

椋田涼さん　　岡部尚さん

漂着者役の皆さん

伊達建士さん

菟田高城さん　　ダビデ・ナラスキさん　　ハビエル・カルバハルさん

４．撮影・編集

こうした準備を経て、2009 年 9 月 13 日～15 日にかけて御宿町や成田市の「房総のむら」などで、ドラマパートと資料の撮影を行った。主な撮影機材はソニーの HDV カメラ Z7J で、同じく HDV の Z1J、V1J を補助的に使用した。

遭難者の救助のシーンを撮影した御宿町の田尻海岸付近は、波打ち際に岩場が迫っており、風向きによって波が強くなると岩場に打ちつけられ危険になるため、撮影には注意を要した。撮影当日も打ちよせる波はかなり強く、遭難者の救助のシーンなど困難な場面もあったが、出演者やスタッフの尽力によって無事撮影することができた。出演者は 9 月半ばの海に入って演技する為、撮影終了後、近隣ですぐに入浴できる場所が必要だったが、漂着地を見下ろす場所に位置する保養施設「波月荘」に入浴施設や支度部屋をご提供いただくなど、地元の方にも多大な協力をいただいた。季節的に、400 年前ロドリゴたちが漂着した時期に非常に近かったが、こうした自然状況の中で 300 人以上を救助するというのは、現代でも相当に大変な作業であり、救助する明確な意思をもって組織的に人を動かさなければ不可能なことだったろう。

ロドリゴの手稿には、海岸で出会った村人たちが漂着者たちに非常に同情した様子を示したとある。千トンの船にのせた財宝も放りだし、着るものもロクになく、命からがら漂着した遭難者たちが助かることができたのは、この村人たちの存在によることは間違いない。

最終的に、ロドリゴ一行は、御宿をおさめていた大多喜城の城主本多忠朝や、徳川秀忠、家康に面会し、歓待をうけることになるのだが、そこには、ロドリゴが徳川家康が交易を望んでいたスペインの貴族であり、フィリピン諸島総督時代に家康と書状のやりとりがあったという、政治的な配慮が大きく働いている。しかし、海岸で最初にロドリゴたちと出会った村人たちは、船にのっていた日本人キリシタンが通訳をしたとはいえ、ほとんどどこの誰ともわからない南蛮人たちを、誰の命令もなく助けたことになる。この時代のアジアやアメリカ大陸での異文化同士の接触が、不幸な形になることも多かったことを考えると、村人たちのロドリゴたちへの行動は、かなり人間的なものだったといえるだろう。そこには、どんな思いがあったのか？

御宿現地での取材の中で、何回か地元の方にもこうした疑問をぶつけたのだが、その中で印象的だったのは、「海のことだから」という言葉であった。漁師たちの間では、例え土座衛門（水死者）であっても、丁寧に扱う、そうすると漁にいいことがある、と言い伝えられていたという。どこまでも広がる海と接しながら生きる人々にとって、その時々の統治者による「陸の掟」とは別に、自分たちなりに、海という外界との接し方のルールがあったのではないか。

御宿は海女の産地として有名で、地元では、海女が遭難者を肌で温めて助けたとも伝えられている。歴史的にみると、当時海女という職業は成立していなかったという説が有力ではあるが、現在見られるようなスタイルではなくても、海に面した岩和田に住んでいたからには、村人は何かしら海から糧を得ていたということは想像できる。嵐の海で座礁し、海岸に打ち上げられた遭難者たちが助かったのは、そうした村人たちが、自分たちの生活の中で培った救助のノウハウを生かして素早い対応をしたからではないだろうか。

ロドリゴの手稿には、村の女性たちが、寒さにふるえる遭難者たちに同情して涙を流し、彼らに「キモノ」を貸し与えるよう、夫や父親に頼んだと書かれている。劇中では、そうした側面を、村の娘としてキヌという女性を創作して表現しようと試みた。

ロドリゴ一行が訪れた岩和田村での様子は、成田市にある『千葉県立房総のむら』で撮影を行った。ここは房総を中心に民家や武家などの移築や復元を行っている体験型の博物館である。今回はその中から「安房の農家」の復元家屋をロケセットとして使用させていただいた。村でのシーンは、村人とロドリゴ、それぞれの葛藤を描くことを中心とした。大勢の異邦人たちの処遇は村人たちの一存ではきめられる訳もなく、一帯をおさめる大多喜城の城主、本多忠朝に使いがだされた。しかし、一旦は全員を刀にかけるという話をロドリゴ本人も聞き及んでいたほどで、事態はどう動くのか誰にも予想がつかなかった。事実、ロドリゴのたちの前に日本に漂着したサン・フェリーペ号にのっていた宣教師たちは、秀吉に処刑され、日本で初めての殉教者となっているのである。

ただ、ロドリゴたちの漂着した 1609 年というのは、関ヶ原の戦いで家康が勝利し、江戸幕府が開かれてはいたが、大坂城にはまだ豊臣秀頼がおり、戦国時代の名残も残っている時代だった。日本からも、商人を始めとして多くの日本人がマニラに渡り、日本人街もあったという。家康はキリスト教は禁止していたものの、海外との通商については強く望んでいたため、弾圧などは行わず、フィリピン諸島総督とも文をやりとりしていた。ロドリゴが、自分たちが日本に漂着したのだと気付いた時、家康からの好意を期待したのには、そうした背景があったからだった。キリスト教を弾圧した秀吉の支配が終わり、江戸幕府の鎖国やキリシタン禁令が完成する前の、ある意味よいタイミングでロドリゴたちは漂着したともいえる。

また、ロドリゴの人物像も重要である。ロドリゴは世界に冠たるスペイン帝国の貴族だったが、ひ弱な宮廷貴族というより、新大陸やアジアといった、異民族と接せる最前線で活躍する司令官であり、ヌエバ・エスパーニャでは銀山の長官をつとめたり、何度も先住民の反乱の鎮圧に成功するなど、実務能力にたけた人物であった。日本や日本人を観察する上でも、スペインがこの国を征服することが可能かどうか、という点から国王への報告を書いている。そうしたしたたかな政治家としての面をもつと同時に、当時のスペイン人としては、かなり日本人に対して友好的な態度をとってもいる。このことは、漂着したサン・フランシスコ号の船長だったセビコという人物が、スペイン本国に、日本人に積み荷をとられたと訴え、日本人は通商するに価しない、という報告を書き送ったことと対照的である。さらに、後日、ロドリゴがメキシコに帰還したことの答礼使としてビスカイノという人物が日本に派遣され、ロドリゴ同様、秀忠や家康に面会するのだが、その際スペイン流の作法を通そうとす

るビスカイノに対して、役人が、ロドリゴはどういう形であってもこちらの形式に従うといっていた、という。若い頃には王妃の小姓をつとめていたというロドリゴであるが、恐らく、言葉がうまく通じない相手でも、好感をもってもらうるような社交術も身につけていたに違いない。キャスティングの際にも、異邦人ではあるが、村人たちがシンパシーをもてるような魅力のある人物、人としての色気のある人物ということを基準にした。

ロドリゴの価値観を示す点を、船が座礁した時の様子から引用する。「最も富たる者もシャツを取出すを得ず、予は携帯せし支那製の大匣とダイヤモンド及びルビー数箇合せて十萬ドカド以上の價あるものを失ひしが、最大の富、即ち生命を存せしめ給ひしことを神に感謝せり。」(村上直次郎訳註『ドン・ロドリゴ日本見聞録』より) こうしたことから、村人とロドリゴとの触れ合いの場面を創作していった。

その村人たちついては、名前もわからず、ほとんど資料がない。しかし、御宿や岩和田の地元の方々とのやりとりの中から、こうした救出劇があってもおかしくない、と思える気風を感じた。御宿町の中でも、岩和田地区はほとんどの海岸線が岩場で、波も荒い。今では民宿を営んでいるところも多いが、かつては漁や海藻の採取など、海と共に生きることが基本だったという。刻々と状況の変わる海では、理屈よりも、必要なことを素早く行動できる能力が必要である。実際、私たちが撮影用の小物などを探していると、すぐ「じゃあうちにあるから今とってきてやるよ」といっていただくこともしばしばであった。また、漁は皆の力を合わせて行う協同作業であり、地域の結びつきが深い。救助という協同作業も、皆で一致団結して向かったのではないだろうか。

それでは、ロドリゴと領主である本多忠朝とのやりとりはどのようなものだったのか。忠朝は徳川四天王本多忠勝の次男として関ヶ原の戦いで初陣を飾り、その武功により 2 代目大多喜城主となっていた。徳川家とも近しい関係にあり、漂着をいち早く江戸に知らせて判断を仰ぐなど、明晰な武将であったと思われる。当時忠朝は 27 歳、ロドリゴは 45 歳である。忠朝は岩和田にロドリゴを訪ねた時、武装した手勢 300 名を率いて、武力を見せつけると同時に、ロドリゴを客人として丁重に扱い、美しい着物や酒などを贈っている。ロドリゴは、日本の米でつくった酒について、ワインの他に、この酒にかなうものはないだろう、とほめているのだが、忠朝も大変酒が好きだったようで、大坂冬の陣ではそれがもとで失敗したというエピソードもある。ロドリゴは手稿の一節で日本人の特徴をいろいろあげているのだが、その中に、酒をたくさん飲むということも書いている。こうしたことから、日本の伝統、酒を酌み交

わして親交を深めるというシーンを創作し、時代劇パートの締めくくりとした。

忠朝とロドリゴは、ロドリゴが大多喜を離れてからも文を交わすなど、親交を結んでいたという。忠朝は 1615 年に大坂夏の陣で戦死したが、ロドリゴは 1610 年にメキシコに帰国後、要職を歴任し、伯爵に叙されて 1636 年に没した。ロドリゴが日本を高く評価し、通商すべきであるとスペイン国王に報告したのも、こうした日本人との対等な人間関係があったからではないだろうか。

こうした再現映像に加え、現在の御宿町や大多喜町の風景やインタビュー、祭りの実景や、資料の撮影などを行い、素材とした。

ポストプロダクション作業では、展示用や上映用にいくつかのバージョンを作成した。映像編集には、Power Mac 上で Final Cut Pro を使用したノンリニア編集を行った。CG については、アニメーションの CG を多くてがける、STUDIO アカランタンにご協力いただき、3D による嵐にあうガレオン船のシーン、2D による図解カットを作成し、実写との合成部分については、撮影データをもとに座礁したガレオン船などを作成した。また、音楽は全てオリジナルスコアで、メディア学部プルチョウ次郎准教授が作曲し、全体的な音声のマスターもお願いした。整音作業には現場録音に引き続き、プルチョウゼミの学生の協力を得た。こうした各部署の尽力により、本編を完成することができた。

５．上映・展示

この映像は、千葉県立中央博物館大多喜城分館で行われた企画展「日本 メキシコ 交流の歴史－ロドリゴ漂着から 400 年－」（2009 年 9 月 17 日～10 月 25 日）での映像展示後、学校法人城西大学　日本／東アジア映像研究センターの設立記念シンポジウムでも展示された。また、千葉県内の博物館・図書館などに配置され、今後は千葉県を始め、メキシコ大使館や大多喜町、御宿町などの関係機関と協力し、日本メキシコ交流 400 周年事業の推進、日本とメキシコの交流を深めるために、また学校教育や生涯学習や広く地域振興のために活用される予定である。

今回の創作によって、海に囲まれた日本が、どのようにして異文化と交流してきたのか、ということに改めて思いを巡らせた。最初に述べたように、この出来事の物証というものはほとんどない。しかし、ロドリゴの心の中に生まれた日本への思いは 400 年後の今日にも残され、そこからまた新たな交流が生まれてきている。そのことこそが、最大の遺産なのではないだろうか。御宿でロドリゴ一行漂着の遺物として伝承されている、梁や壺はそうした「思い」の形としてドキュメント映像に残した。

この映像をきっかけに、少しでも異文化交流への理解が深まれば幸いである。

末尾ながら、撮影に協力いただいた御宿町、大多喜町を始めとする地域の皆さまと、国立歴史民俗博物館始めリサーチや資料提供にご協力いただいた皆さま、展示やスチル、ポスター作成などに多大

な協力をいただいたメディア学部の教職員一同、出演者、スタッフに謝辞を述べたい。

展示用ポスター（作成　平野メディア学部副学部長）

文化庁地域文化芸術振興プラン推進事業

『ドン・ロドリゴの来た道』　（2009 年／ビデオ／32 分）

＜企画＞ 千葉県立中央博物館

＜制作＞ 城西国際大学メディア学部

日本／東アジア映像研究センター

＜製作＞ 千葉県地域文化振興プラン

推進事業実行委員会

＜監修＞ 小倉明　（千葉県文化振興財団常務理事）

＜出演＞　ドン・ロドリゴ／ダビデ・ナラスキ

キヌ／安部魔凛碧

伊兵衛／菟田高城

勘吉／岡部尚

音吉／椋田涼

フジ／滝川いづみ

アントン／ハビエル・カルバハル

本多忠朝／伊達建士

甚兵衛／飯島大介

船員／ミゲル・ルアノ　アスアヘ・アラモ・マヌエル　ジョーダン・コーネス

ロドリゴ・ゴーザ　ルイス・アレサンドロ・ヴァレトラ　クラウンツ・ゾルタン

パブロ・カーロ　バドマー・パトリック　リオ・ハイベルト・ザック

ベンジャミン・デービス

村人／白井陵　二上義久　本島愛子　牧野奈津美　湯沢瞬　金谷岳大

比嘉健次　奥村駿平　島野義孝

インタビュー出演／齊藤清一　岩瀬能和

＜スタッフ＞	プロデューサー	成瀬活雄
	脚本／編集／監督	竹藤佳世
	ラインプロデューサー	大日方教史
	撮影	辻智彦
		大久保礼司
	照明	大久保礼司
	録音	高田　林
	作曲	プルチョウ次郎
	スペイン語監修	ハビエル・カルバハル　アルベルト酒井
	CG	大平幸輝（STUDIO　アカランタン）
	キャスティング	小林良二
	衣装	村島恵子　沢柳陽子
	ヘアメイク	新井みどり　岩浅美都子
	スチル／ポスター	平野博一
	映像展示	島野義孝
	印刷物作成	小波津美香
	車両	相馬亨
	監督助手	櫻井信太郎
	撮影助手	佐藤洋祐
	照明助手	財津俊介
	録音助手	佐野優介　藤崎広武　力丸晃次
	制作デスク	松平康秀
	制作主任	児嶋冬樹
	制作進行	横井義人
	制作助手	金谷洋志　森山貴史　佐藤城文　岸野尚也
		本間光平　黒川賢史郎　和智大二郎　橋詰拓真

＜協力＞　大多喜町　御宿町　御宿町歴史民俗資料館
大多喜町観光協会　御宿町観光協会　千葉県立房総のむら
御宿岩和田漁業協同組合 千葉県文化振興財団　たばこと塩の博物館

＜撮影協力＞ 海洋生物環境研究所　波月荘　104co.ltd. おかもと技粧　高津装飾美術
渋谷プロダクション　バックストリート　宮島忠

＜資料提供＞ The British Library　国立歴史民俗博物館　東京国立博物館
千葉県立中央博物館大多喜城分館 仙台市博物館
大阪観光コンベンション協会　金地院
＜写真提供＞ スペイン政府観光局　長崎市　長崎県観光連盟

【参考文献】

小倉明著「ドン・ロドリゴの幸運」（2008 年 汐文社刊）

村上直次郎 訳註「ドン・ロドリゴ日本見聞録／ビスカイノ金銀島探検報告」（1966 年 雄松堂刊）

大垣貴志郎監訳 「ロドリゴ・デ・ビベロ　日本見聞記」（1996 年 たばこと塩の博物館刊）

金地院崇伝著「影印本異国日記　金地院崇伝外交文書集成」（1989 年 東京美術刊）

©千葉県立中央博物館／城西国際大学 2009